

Newsletter

MAY 1998

山の思い出

竹内 佐郎
(昭和十三年卒)

一、少年期

初めて山に登ったのは一九二六年(以後略して二六年とする)の伊吹山だった。それから富士山、白馬岳、燕・槍ヶ岳縦走と、三年続いた夏山だった。昭和初期の上高地は、まだ静かだった。大正池も大きく、水中に立つ枯れ木も沢山残っていた。徳本峠を越えて帰った。スキーは、二七年に妙高で初めて滑り、四年目には、野沢温泉で毛無山の頂上から独りで降りた。

二、松高時代

上級学校は文句無しに旧制松本高等学校とした。三二年入学が許された。松高山岳部の新入部員歓迎登山は、四月に美ヶ原及び白馬岳スキー登山であった。

松高在学中、年間百二十日ちかく山に入っていた。当時、毎年七月の期末試験が終わると、夏期登山班を組織し、いわゆる縦走に出発した。入学した年は、先輩に連れられて、天幕を持ち針ノ木峠より後立山を縦走した。三三年には、私がリーダーを仰せつかり、剣

沢にキャンプし、剣岳東面のハツ峰キレット、源治郎尾根等に登った。この夏山行事が終わると、上高地の小梨平にあるテントに集合した。このベースキャンプの生活は、山岳部員にとって最も楽しいものの一つであった。

私が山について教示を受けた、松高関係者三人の名前を挙げるとすれば、今井田研二郎(五年先輩、近代アルピニズムを導入した人。私は三二年夏、前穂頂上から明神岳寄りの稜線を経て奥又白池に至るルート開拓に同行した)、中村譲次(二年先輩、冬期屏風岩初登攀者)、村山雅美(四年先輩、南極点到達者)である。

ここでは譲次に係わることを二つ三つ記すことにする。彼の一年後輩には冬山に入る者がなく、二年後輩の私達の育成に心を配ってくれた。彼は大学入試を済ますと、横尾の岩小屋に来て北穂登山を指導してくれた。その時、岩小屋にきた単独行で名声があった加藤文太郎に対し、譲次は死の予言をしている。その場に居合わせた私は、後程彼の鋭い直感に驚かされたのだった。

彼の主義は、「山案内人を連れて登るな」だった。私はこれに従って、冬の立山・剣や、槍・穂高には案内人を使わなかった。

彼と共に冬の上高地で酒を飲んだことがある。冬は、常さんと庄吉、温泉ホテルの冬期番人の木村殖の三人しか

住んでいないが、この三人と、そこへ日大を卒業したばかりの初見一雄が供を連れて現れ、合流した。案内人の中畑政太郎も居合わせた。計八名であった。譲次と初つあんの呼吸がピッタリと一致した酒盛りだった。一升瓶が七本空くまで覚えていたが、八本目に移ったとき退席した。初つあんのあの話術は凄い。中畑は軍隊に入って身体が鈍ったと言う。木村は猥談だった。常さんは酒が入ればきまってしまう熊や羚羊の狩りの話はなく、黙々と飲んでいた。皆は明け方近くまで飲んでいらした。そのあと、中畑は朝食が終わると中尾峠を越えて帰っていった。

三、京都大学時代と富士山

京大を志望したのはヒマラヤへ行きたかったからだ。そして加藤泰安と出会った。彼を通常タイアンと呼んでいたが、正式にはヤスサダであり、場合によってはテーアンとなった。彼はヒマラヤへ行く希望から留年していたが、卒業は同時であった。

彼とは二年間同じ下宿で過ごし、授業に出なくとも部屋には毎日顔を出した。旅行部長であった木原均先生の農学部研究室には足繁に通った。そこには平吉功先輩がおり、今西先生におめにかかるチャンスも多かった。

そんな時代背景の中で、泰安は、二回の富士山行を企画実行した。初回は

三六年三月末で、上出大沢（大沢崩れで有名）の直登と、その冬のベースキャンプ地の選定であった。初めテント予定だったが、五合目右岸にあった木花咲耶姫を祭る神社が快適な宿泊場所となった。登頂の日、三日目にやってきた。八合目から直登組とサポート組に分かれ、無事測候所北側の稜線に出た。

二度目は、この年の暮れに精進口登山道から入り、かつて見定めていた御庭に基地を置き、頂上に前進キャンプを張ると言う計画だった。雪で夏道の消えた青木ヶ原を横断するの目的の一つだった。荷物が多かったのでベースまでのボツカ手配のため、私は精進ホテルへ一日先行した。その日は天候が悪く、白糸の滝から朝霧高原へ出ると、自動車道も定かならず雪煙の中をやつと宿に着き、人夫三人を頼む事ができた。

第一日は快晴の中、三合目泊りとなった。計画は順調に進んだ。この山行で唯一つの失敗といえば、富士の風がとても凄いと言うことであつた。頂上の火口原に前進キャンプを設置した日の夕方から吹雪となった。二日間続いた。三日目の夕方テントを残して五合目に帰った。このテントを撤収するため再登頂したが、雪に埋まり発見出来ず、融雪する夏まで放棄せざるを得なかった。

この山行には、丁度還暦を迎えられていた田中喜左衛門大先輩と西堀先生が、激励と慰問のため来訪された。田中さんには何とか厳冬期の登頂をしていただきかったので、泰安と二人でザイルの両端を持って努力したが九合目で力尽きて撤退した。

また近くの氷の壁で、ピッケルの切れ味くらべをやつて見るようになった。西堀先生はシェンク、

泰安はビヨルンシュタット、私は門田だった。シェンクはブレードの部分に曲がつてしまった。持ち主曰く「曲がつても折れないところがシェンクだ」と。この話は暫くの間、我々若手のよい酒の肴となった。

とにかく富士山は日本一の山だと思う。二七年に初めて登り、最後は八四年である。夏期七回、積雪期四回である。

四・富士山続き

ついでながら、積雪期三度目を述べよう。四六年十二月だった。当時一番安価に冬山気分が味わえる山は富士山と言うわけで、村山に誘われた。当時、会社で溜まっていたストレス解消のため、結婚二ヶ月目であつたが喜んで同行した。五合目の避難小屋に無料で泊り、吉田口から頂上を目指した。快晴ではあつたが、強風が吹き荒れ、吹雪の中におかれたようなバイフェンが我々を包んだ。八合五勾付近から撤退した。

四度目は五十年頃であつただろうか。日本山岳会主催で、やはり村山に誘われた。四月末だった。その夜、吉田大沢で滑落事故があり、日本山岳会で救援隊を出した。翌日村山と二人で登頂した。下りのときゴツゴツした尾根ではなく、マープルクラスとした谷を快適に下っていた。下りのとき見知らぬ一人が私達の中に加わった。しかし彼の歩き振りは危ないようなので、六合五勾目辺りで尾根筋へ出た。その時「コノバカター」と大叱声があつた。見ればその声の主は松方三郎先輩であつた。昨夜の事故があつたところへ、アンザイレンもせず見知らぬ人と降りてきたのだから、馬鹿者に見えたのだろう。

五・北海道・樺太の旅（京大時代）

三七年春、今西先生から「日高の幌尻岳に七月下旬に登りたいから段取りしてくれ」と言われた。私は北大山岳部にその旨を伝え、また先生希望のアイヌの山案内人二人を世話してほしいと申し入れた。

結局、私と一年後輩の西村永三（成蹊高校出身）及び北大一名が、先生と共に札幌から夜行列車に乗った。翌朝帯広でアイヌの山案内人と合流し、八千代行きのローカル線に乗り換えた。終点下車しトツタベツ川まで、北海道らしく一直線の道を八キロメートル程歩き、川辺で昼食をとった。食後今西先生は魚を釣れと言った。人擦れしてないので大きな山女を二匹釣った。先生は直ぐ腹を裂いて何を食べているかを調べた。ここから上流に向かって道はなく、釣人の踏み跡を辿り、渡渉しながら溯った。ヒゲマが出ると言うので五分毎位に呼笛を鳴らした。途中で湯気の立ったヒグマの糞を見掛けた。その日は中流で野営することになり、先生はテント張りや食事の準備は私達に命じ、アイヌには魚を釣つてこいとのことである。今度は岩魚が沢山獲れた。ここでも先生は魚はらわたを出して食べたものを調べていた。

翌日は更に溯上した。昼頃源流の最後の滝の上に出た。滝壺には魚が群れている。上から釣り糸を垂らして釣ったが能率が悪い。私はザイルで一五米下の滝壺の脇に降り、釣れた魚を外す役目に廻った。岩魚は百匹近くになっていた。先生はその岩魚も腹を割いて調べた。当時、先生は「棲みわけ理論」の研究をされている最中だった。その日はトツタベツ川の八合目にテントを張り、岩魚を肴に一杯飲んだ。

次の日に快晴に恵まれて幌尻岳の頂上に立った。帰りは新冠川を下り、一泊して静内に出た。先生とは札幌で別れた。

私と西村は更に山に登るべく、釧路を通り阿寒湖に向かった。途中の帯広駅には幌尻岳で一緒だったアイヌ二人が牛乳を一升瓶につめて見送りに来てくれた。彼等から聞いた祖父母の苦難の話、明治初期の日本の庄政を受けた話は、忘れることの出来ない思い出を残した。

雌阿寒岳に登り、摩周湖を通り、層雲峠を経て大雪山に登り、旭川を通り小樽に着いた。小樽には西村の成蹊時代の学友、橋本が住み、彼のところは港湾荷役を手広く商う旧家だった。それで樺太の各地に支店があり、宿泊は引き受けるという。また、西村の父は日本郵船の偉いさんであり、往復の船賃は俺が持つと言った。幸い私には、母から非常用に使えと言って渡された百円があった。

それで樺太行きが決まった。真岡で下船し、石炭液化工場を見学し、間宮海峡を北上し、石炭の町、恵須取に至った。当初は五十度線に近い安別に行き、国境線を半田沢に出るつもりであった。しかし、露領に入る危険があると言うので、南下し、山越えして敷香に出た。ここに滞在し、半田沢、オタスの杜、多来加湖に遊んだ。原住民のギリアークやオロッコ達はアイヌと違って優遇されていた。豊原では鈴谷岳に登り、大泊を経て小樽に帰った。

この四十日以上に亘る旅で、京大は山岳部でもなく探検部でもなく、旅行部であると言うことが実感出来たような気がした。

六、老後の山

(1) 日光の山：舟橋明賢の世話で、学習院の光徳小屋を根拠に、今西先生と共に、八二年には太郎山、八三年温泉ヶ岳、八四年女峰山と、三回歩いた。印象は女峰の時間が一番深い、ここでは最初の太郎の事を記す。勿論、泰安は来ているものと信じていた。が彼は来ていなかった。しかし若いAACKの中堅の方々と出会うことができた。帰るとき、地図の裏に今西先生を中心に全員の寄せ書きを記し、泰安に届けた。彼はこの山行の通知を受けていなかったらしく「今西先生やお前が行くなら、俺も行きたかった」と言った。そして翌年四月に、この世を去った。

(2) 濁沢より奥穂への旅(八四年四月)

私も古希の年を過ぎた。もうビッケル・アイゼンのお世話になることもあるまいと、この旅を、同じ会社の後輩中島伊平に相談した。彼はサポートに沖津文雄と本多勝一が同行してくれると私に告げた。そんな時泰安が亡くなって、葬儀のとき、早大出の折井健一に出会った。彼とは三年の正月、槍平の小屋で一緒になったことがあるので、よく知っていた。彼も私と同じ日程で奥穂山荘を訪れると言う。

とにかく私達(中島、本多、沖津)四人は横尾小屋に泊まることになっていたが、本多だけは仕事のため同じアズサに乗れず、タクシーを飛ばして徹夜で追及して来た。彼はずっと断酒していたが、この夜は彼も飲んだ。翌日は快晴だった。昼食にはビールも飲んだ。正午奥穂山荘に向け出発した。逆光をまともに受けていた。山荘に着いたとき、山荘の設立五十周年の手拭を渡された。若い三人は荷を山荘に置き唐沢岳に出掛けた。私は

羽毛服を纏って外に出た。前穂高北尾根は美しかった。その夜、眼が痛く涙が出て止まらない。雪眼にやられたのだ。眼鏡は持っていたのだが、掛けるのを怠ったためだ。痛くて寝れぬまま明日の奥穂登頂は諦めねばならないと思った。二段ベツトの上に居る本多のヘッドランプが光っている。声を掛けると彼は原稿を書いて居たのだ。翌日三人は頂上に行った。私は流れる涙を拭いつつ小屋に残った。本多と中島は仕事があるからと下山した。沖津が私のガードのため残ってくれた。約束していた折井が正午濁沢から登ってきた。昼食を共にして、沖津と私は下山の途について。

ビッケルとアイゼンであるが、ビッケルはまだ手元に残すことにし、プリマのアイゼンと三二年に松高入学時お祝いとして貰ったトンキンのゴッイスキー杖を松高に建てられた旧制高校記念館に寄贈した。

(3) ネパール・欧州アルプス・ニュージーランド・カナダ：(九三年まで毎年)の如く出掛けた。省略)

(4) 私は山を登っていて大変幸せだった。その分、家族には迷惑掛けたものと思っている。今でも、わらち会(松高山岳部OB)、AACK、JAC、一水会(通産省の山の会、私は準会員になっている。勿論三上太一も顔を出している)に所属し、月二回は酒を飲みつつ、「山」を思うときが与えられる。現在齢八四才を過ぎたが、今暫くは、この幸せを持ち続けたい。

国際登山・

探検文献センター

創設二十五年に想う

前田 司

一九七三年四月にAACK国際登山探検文献センターが誕生した。今年でちょうど二十五年を迎える。

このセンター設立の話が出たころは、ヤルン・カン遠征の計画が行きつまり、AACKの活動は沈滞していた。こんなとき梅棹忠夫先生が持ち込んだ日本万国博覧会協会（万博協会）の補助金による国際登山探検文献センター（以下文献センターと呼ぶ）の設立話は、鬱積する当会のエネルギーの格好の噴火口となった。登山や探検の文献を集めた図書館をつくることは、諸先輩が永く構想を持っておられたものであったが、現実には金も場所もなく、遠征活動が活発化するたびに日陰に追いやられてきた。幸い（？）にも遠征もなく、金も出来る。「遠征隊を一つ出す勢いで取り組もう」を合言葉にこの実現に向って活動が開始された。梅棹先生も、またその手足となって実務を担当した栗田氏もこのときは京大人文研に在籍しておられたので動きも早い。

ところが面白いことに、よんだ水も流れ出すと勢いがつくもので、一九七二年八月初めに万博協会から正式に文献センターの補助金の決定通知が来るのを追うように、月末にヤルン・カン解禁の知らせが届いた。

開店休業のAACKが突如巨大プロジェクトを二つ抱えることとなった。さすが永年の知と活力の蓄積は二つの大事業の進行をものもしなかったが、

やはり勢力の多くは本業（？）の遠征にそがれたことはいうまでもない。かくして文献センターの誕生はヤルン・カン遠征の陰となり、未だに十分機能せぬまま二十五年を迎えることになった。

このセンターについての正式な記録は、栗田氏の協力で梅棹先生が、『今西錦司博士古稀記念論文集』第一巻に詳細に記述しておられる。

しかしこれは表向きの話。二十五周年を機に、いまますこしセンター設立の実像を知っておいていただきたく、古書籍商という商売柄、設立にたずさわった者として筆を執ってみた。

補助金のこと

一九七〇年大阪で開催された日本万国博覧会は大成功でその収益の余剰金が二〇〇億円近くあり、万博協会はそのうちの四五億円を万博基金として、「人類の進歩と調和」を謳った万博の理念にふさわしい事業へ補助金を交付することとなった。

梅棹先生がその審査員であったことから、この補助金によって積年の懸案であった登山・探検の文献センター設立を先生が提案され、一九七二年三月に仮申請。同年のAACK総会でこの事業が承認された。七月に第一回設立準備委員会が招集され、委員長の選出、専任職員の採用、会員への趣意書作製、実行予算案、募金方法などが審議された。委員長には四手井、副委員長に梅棹、委員に今西（錦）、桑原、西堀、加藤、吉井、山口、平井、酒井（敏）、谷、岩坪、木村、栗田、松田、上田、井上、薬師の各氏が選出された。また専任委員として司書資格を持つ金山清一会員の令室金山倫子氏が決定した。申請する総額は六五六万円とされた。ところで万博協会の補助は、申請額の半分以内であるというマッチファンドである。六五六万円の半分三二八万円は補助していただけが、その同額を当方でも用意せね

ばならない。もしこちらの額が少なければ補助金もそれだけ目減りする。目一杯補助金を確保するため委員会の精力はこの自己資金を生み出すことに注がれた。遠征とちがいの事業では企業などからの募金は期待できないし、なによりヤルン・カンの募金のじゃまをするわけにゆかない。そこで会員より浄財を集めることとなり、卒業年数×一、〇〇〇円を原則として募金の依頼がなされた。しかしいざ現金の寄付というとなかなか目標額に達しない。そこで物納が考えられた。

事業資金の多くは文献購入に当てられるのであるなら、最初から購入予定の登山、探検関連の書籍を納めていただいてもよいわけである。会員の多くは不要になった山岳書をお持ちのはずである。ところが協会に対しては、まず資金があつて、その資金を使って文献を購入するという金の流れを明確に示さなければならぬ。行程を飛ばすわけにはゆかないのである。

そのために物納された書籍を金に換え、その金で資料を購入することになる。しかし本につけ、道具につけ、いざ売り払って金にするとなると、よほどのものでないとまとまった金額にならぬのはどんな経験がおありだろう。そこで「キクオ書店」という京都河原町で古書籍を商う小生が呼ばれた。現金にかわって送られてきた会員の書籍を小生が一旦買い取り、その額を会員の寄付金として入金。当方の買い取った書籍は集まった資金によって改めてキクオ書店より買っていたこととした。悪いが古本屋のやるような二束三文の買値でなく、会員の寄贈本はほとんど売値に近い評価で買い取ったから、寄付金も目減りすることなくセンターの出納帳にどんな現金の入金が記帳された。

次項で紹介する三高山岳部の旧蔵書もこの方法で算出され、吉井良三氏以下七八名の寄付金として

九三三、八〇〇円が記帳されている。これは三高山岳部旧蔵書の当時の評価額でもある。

一九七二年度の万博協会の補助事業は翌年三月に無事終了し同年四月に文献センターは設立する。しかし実際の作業はこのあとと続き、ヤルン・カン遠征が一段落した一九七四年にもう一度万博協会より補助金を受けている。補助の申請額はあつたかましくも前回よりさらに大きく四百万円としたが、実際には一二〇万円の補助金が決定した。減額になったとはいえ、今回もまた同額の自己資金を用意せねばならない。前回の方式通り本の寄付で帳尻を合わせる予定であつたが、ヤルン・カン遠征のちようど一年後、交通事故で亡くなった浅野潔隊員のご家族から文献センターへ現金で百万円の寄付があり、またアラスカで亡くなった宮木靖雅氏の蔵書の寄贈を受けたお蔭で、これだけで自己負担額を用意することができた。

コレクションのこと

文献センターの資料の受け入れは、どこの図書館もやるように、まず受入原簿に受入年月日、受入番号（受入順による通し番号）、書名、発行所、出版年、寄贈者、本のサイズ、ページを記入する。本にはタイトルページの裏に「京都大学文学士山岳会登山探検文献センター蔵書」と記された大きい楕円の印を押し、受入番号と受入年月日を記入。寄贈本には物納の場合も含め「〇〇氏寄贈」という赤いスタンプを押す。

八月始め万博協会の補助金が決定し、文献センターの設立がいよいよ実現することになるや、早速並河功名名誉会員のご遺族より氏の蔵書が寄贈された。受入は九月二十八日から始まり、受入番号第一番から一九六番までが氏の寄贈本に付された。

十月末AACK全会員に募金と寄贈本の呼びかけ

がなされ、多くの会員から募金や本が届きはじめた。

栗田氏の岳人第十号から一八四号までの寄贈につき、梅棹先生のコレクション約三五〇点が届く。先生からは本だけでなく、一九五〇〜六〇年代の日本の登山、探検について報道された新聞の切り抜き数千枚をファイルロッカーごといただいた。残念ながらこれは膨大すぎて、未だに受入は済んでいない。

つづいて原田、吉野、上田、酒井（敏）の各会員より蔵書が寄贈される。

この頃からヤルン・カン遠征の準備もいよいよ本格化し、荒神口の東南アジア研究センターの一角に間借りするAACKのルームは本と遠征隊の荷物が混在しはじめた。文献センター設立の実行委員である松田、井上氏は遠征隊に専念し、若い会員も年末に送り出される遠征隊の船荷の準備に大忙しである。そのため文献センターの仕事は栗田氏の指揮のもと、金山夫人が、梅棹エリオト君やその友人のアルバイトを動員して進めることとなった。小生も古書の評価だけの仕事では済まされなくなってきた。こうした中で本文献センターの蔵書の柱となったのは、三高山岳部の旧蔵書の寄贈である。文献センターへの移管の経緯は先述の梅棹先生の論文に詳しいので参照していただきたい。

この山岳部の蔵書は吉井良三先生が廃部以来ずっと保管されておられたが、十二月二十一日梅棹先生の立会いのもと、松沢氏がカートンボックス七個に入れてルームに運び入れた。

この中には小島鳥水の「日本山水論」や「日本アルプス」全四巻、「日本山獄志」、「山行」、「高山植物写真図聚」揃十巻やウェストンの「日本アルプス登山と探検」の原著など山岳書の稀覯本があるわあるわ。それ以上に値打物は日本山岳会の「山岳」が

創刊号より四十号までがほとんど揃い、「三高山岳部報告」、「こだま（五高）」、「山稜（八高）」、「針葉樹（一橋大）」、「嶺（京都一中）」、関西学生山岳連盟報告などの旧制高、大学の山岳部々報類である。これらは古書市場でも流通が少なく高値を呼んでいる。当時このコレクションを小生は九三万余円と評価したが、今ならこの五倍の値がつくであろう（但し相当読まれただけあつて痛み、汚れが多く、古書として売物にするには難点があるが、こうした状態は無視して評価した）。

万博協会から十一月末に事業の一部前払金として補助金の半額の入金があつたので、蔵書の充実をはかるため、ヒマラヤ文献に詳しい薬師氏と栗田氏、それに小生とが京都、東京の古書店へ買入れに行った。小生までお供したのにはわけがある。

ある機関や個人がまとまった古書を直接買い出すと、せまい古書業界ではすぐその分野の古書価が値上がり、売り込みも激しくなる。こんなときは一業者が依託をうけて、知らん顔して集めてまわるのがうまい方法なのである。

文献センターの設立の後も文献の収集活動はつづけられ、泉靖一氏やヤルン・カンに逝った松田隆雄隊員の遺品が寄贈された。

さらにヒマラヤ関係の洋書の充実をはかるため、一九七三年十二月に薬師、土生氏と小生がインド、ネパールへ出かけた。ここで見た本はイギリスなどより何分の一の値であつたので、相当量買うことが出来た。ただ蛇足であるが、あれから四半世紀、小生の古書鑑定眼もいくらか肥えてくると、これらの本は安いとはいえず、インドの気候、風土が本を相当痛めており、商品としての古書の評価は欧米のものに比べて安くて当然であることがわかった。

インドの買付本は個々の書店から送ってもらったが、うさんくさい本屋もあつて金を払ったものの届

かぬ本もあり、これらをカルカッタに留学していた河合明宣会員が一年半ねばって送らせてくれた。

万博協会の二回にわたる補助事業によって一九七五年までに三六一〇点を収集して一応文献センターの形は整った。その後AACKの遠征活動は活発になったが、文献センターへの運営資金までは生み出されることなく今日に至っている。

ただ一九九二年に奥貞雄氏より和洋九八冊、地図一六二枚が寄贈され、久々に受入台帳が開かれた。最近では岩坪五郎氏の寄贈があつたが、まだ受入はされていない。

ルームのこと

資金について問題なのは文献の保管場所である。

AACKのKを「京都大学」と称しているが大学当局に籍があるわけではない。ルームも大学構内にあるものの、これは過去の京都大学と結びついた学術探検の経緯から、大学の空き部屋を一時的に間借りしていたにすぎない。そのため大学の都合によって何度か移転を余儀なくされたが、何千点もの文献を保管することになればこのような浮き草ではすまされない。そのため文献センターの設立には補助金の獲得と同時に保管場所の確保も大きな仕事であつた。

補助金の申請書を提出すると同時に梅棹、栗田氏が京大図書館の事務局長にかけ合つた。梅棹先生の最初の魂胆は、この文献センターを大学の図書館の一分室として機能させることであつたが、文学部に資料展示館ができる予定であることや、図書館に所属することによって人員を提供することは困るという理由から、図書館方向からの借室は困難となつた。

そこで大学本部の浅野事務局長に梅棹先生が交渉された結果、文献センター設立の意義を理解され、

管財課に大学構内の空き部屋を貸すよう指示された。

当時木造の空き部屋はどの学部にもあつたが、戦後間もない京大旅行部のルーム火災で貴重な文献を焼失している苦い経験から、木造でない防火の頑強な部屋を希望した。となるとなかなか見つからず、十一月末になってようやく本部構内の旧防災研究所事務室建物の西半分の借用が決定した。大学内の建物であるので今までのルーム同様無料で借用できると思つていたが、正式な契約にもついでに社団法人が国有財産を借用するため借料が必要となつた。安心できる保管場所ではあるが、年間約八万円の家賃は思いもよらぬ出費となつた。

ついでに申し上げるが、この賃借契約は現在も続いているが、大学当局はここをAACKのルームとして貸与しているのではなく、『文献センター』に貸していることを知っておいてほしい。

ところで、桑原先生は京大旅行部の火事でドーント文庫などの貴重な文献を失つたことによりほど悲嘆されていたのであろう。文献センターの設立にあたり先生は、防火のしっかりした場所を選ぶだけでなく、貴重本を収める耐火金庫も用意するよう注文を出された。

そのためルームが決定するや、火事にも地震にもびくともしない、おまけに盗難防止のため暗証ダイヤルに鍵付の大金庫を購入した。ところが手伝いのアルバイトが面白がつてダイヤルを回して遊んでいるうち鍵がからなくなつてしまった。今もこのままで、防犯には何の役にも立たなくなつたが、防火には心強い。桑原先生もこの金庫を見てやつと安心され、一八六四年刊の「ウェッターホルン登頂記」や、一中、三高、京大旅行部時代の山行のアルバム、スイスアルプスの地図、それに焼失した京大旅行部所蔵の洋書目録など貴重な文献資料を寄贈された。

目録・分類のこと

文献センターが入手した図書、資料のうち、地図や切り抜きなどとは別置にして、書籍は受入順にロッカー式書架に配架された。また受入と同時に手書きで図書カードを作成し、これを夫々二枚複写し、著者別、書名別、分野別のカードボックスに収め検索の便をはかった。ただ分野別のカードについては、所蔵の図書のほとんどが登山、探検の分野であり、日本図書館協会の十進分類にもついでに分類するとどれもが二九〇、七八六群に属してしまい分類の用をなさない。ここでは、例えば地域別や目的別など独自の分類をつくる必要がある。設立準備段階ではずいぶん討議されたが結論が出ぬまま現在に至っている。そのため分野別に分類すべく用意したカードは、束になつてしまわれたままである（のはずである）。

補助事業の会計年度は一九七三年三月に終つたが、本来年度内に仕上げねばならぬ文献目録の刊行は、内容をすこしでも充実するため、一年延期された。年度末にまでに収集された二八一〇点に、松田隆雄氏寄贈本を加えて受入番号二九二四番までの文献目録をAACK時報「臨時号」として刊行した。

費用の関係からこの目録では、書名を和書は五十音順、洋書はアルファベット順で掲載するのみとなつてしまつたが、利用の便からは著者別の索引もつけるべきであつた。また刊行を急いだため充分な校正の時間がなく、その結果大変誤植が多い。欧文にいたつては誤植の上にウムラウトやアクサン記号など特殊記号の欠けているものがとても多く、文献目録としては実に恥ずかしいものである。

またここには宮木氏寄贈本や、受入が間に合わなかつたインド・ネパールでの買付本、また地図類、アルバム、フィルムなどの資料類などは入っていない

い。これらはすぐに続刊あるいは増補版を刊行する予定であったが、第二次の補助金が少なかったことからその出版費用を捻出することが出来ぬまま今日に至っている。

金の切れ目は縁の切れ目とはいえ、未完の作業はいつまでも気になるものである。

今後のこと

万博協会の補助金以後まとまった資金援助はなかったものの、文献センターはAACKの通常会計でともかく運営されており、初期のロッカー式書架にかわって九台の移動式書架が購入され、受入順の配架はかわらぬものの、ずいぶん本が見易くなった。

とどこおっている本の受入もぼちぼち進められ、一九九二年の奥氏の寄贈本まで三八一〇点が受入完了となっている。

しかし一般会計の図書費で毎年購入されてきた本や、遠征時の参考書、そして会員からの新たな寄贈本などはとりあえず本棚に並べられているが、蔵書印も押されぬままである。また書籍以外に寄贈された地図や写真、フィルム、新聞の切り抜き、それに本文献センターが最も誇ることができるコレクションであるはずの数々の遠征隊の記録、資料がすべて未整理のままロッカーにしまわれている。これらを閑なものかぼちぼち整理してはともこなせる量ではない。なんとか本腰を入れたいものである。ともあれ一刻も早く実現したいのは文献、資料のデータベース化である。そうすれば管理も検索も容易であるし、最新の受入分まで入れた目録の作成も早々に仕上げることが出来る。

今ここで小生が文献センターの意義を説く筆力はないが、これを今後さらに充実して維持してゆこうとするなら、もう一度文献センター運営のためのまとまった資金を獲得することを真剣に考えるべきであろう。

キリマンジャロ

登頂記 (続き)

安仁屋政武

四日目 (九月十二日) 快晴

八時前に出発。ラテラル・モレインの間を流れてくる小さな川(清流)を渡ると、道は急な斜面をジグザグに三〇〇メートルぐらい一気に登る。そのあとはわずかな高低差のトラバースである。いくつかの流れを横切り、最後の清流カランガ(Karanga)谷で早い昼食をとった。この先から、明日の行程の最後まで水と薪がないのでそれぞれ持つ。左手にモレインがいくつも見える。昨日もそうであったが、年代測定用のカーボン14のサンプルを採集できないだろうかと、キヨロキヨロしたが、乾燥しているの望みのないことが判った。モレインの分布をきちんと作るだけでも、かなりのことがわかり面白いらうな、などと考えながら快調に歩いた。

一時頃大きなモレインのところで、そのまま南面をトラバースしてコカコラ・ルートに合流する道と、上のバラフ小屋への道との分岐点にきた。標高は約四〇〇メートルである。モレインの尾根道を登り、傾斜が緩くなった所にバラフ小屋がある(四五〇メートル)。二時半頃に着いた。気温は低いがシャツ一枚で大丈夫であった。

明日は全行程で一番長い日である。約一五〇メートル登って二二〇メートル下るので、一〇、一五時間のアルバイトである。夕食後、ガイドが来て、頂上で日の出を迎えるために、明日は一二時半(夜中)に出発すると告げた。七時前に寝た。

五日目 (九月十三日) 快晴

十一時四十五分に起きた。軽い頭痛がしたが、お茶とパンの軽い食事をとり、予定通り一二時半に出発した。アメリカ隊が先行しているが、グレーナとフランコはまだであった。ポーターはここから下ってトラバース・ルートを行きコカコラ・ルートに合流した後、ホロンボ(Horombo)小屋でわれわれを待つ。そのため後始末をするガイドを残して満天の星空の暗やみの中を一人で歩きます。月明かりとリヒトを頼りに歩くが、時々踏み跡が判らなくなる。まもなくガイドが追い付いた。彼はさすがに道を知っている。ガイドのテストでここを夜中に歩くことが要求されているようだ。いつの間にか頭痛は消えていた。今日は雪／氷の上を歩くので、ザンパランの軽登山靴に履き替えた。また、汗をかくのを避けるため、パッチもはかず、上はアミシャツと薄手の長袖シャツの軽装で出発した。素手ではかじかむが、ハンガロ手袋をすると汗ばむ。亀のペースで登るアメリカ隊を抜いてしばらくしたら、フランコが元気に追い付いてきた。常にテント場に一番乗りしていた張りきりボーイである。登りは砂礫のガレ場が多く足元がズルズルと滑るので、ウォーキング・スティックが非常に役に立った。五三〇メートル?付近で寒くなったので、オーロンのパッチと長袖のアンダーシャツを着けた。マイナス五度?ぐらいであろうか。風はない。快調に登り、途中休憩していたフランコを抜いて、火口壁のステラ・ポイント(Stella Point, 五七六〇メートルぐらい)に四時半に着いた。身体は非常に軽く、ここからウフル(Uhuru)・ピークまでのだらだら登りをあつと言う間に登り切り、頂上には五時過ぎに着いてしまった。日の出の一時以上も前で誰もいない。今日のピークが一番乗りである。

着いて数分したら、ガイドは降りようと言う。バ

力を言え、日の出を待つと言って、借りてきたダウン・ジャケットを着て、その上からゴアテックスの上下を着けた。気温はマイナス一〇度ぐらいだろうか(海岸沿いのダルエスサラームの明け方の気温が二四〜二五度である。六〇〇メートルなので、単純に考えて約三六度低い)。頂上は砂礫のやや広いところなので、風を除けるため仰向けに寝て待った。幸いに強い風ではなかった。五時半過ぎた頃にコカコーラ・ルートの第一陣がやって来た。日の出は六時一〇分頃であった。天気が素晴らしく、見事な日の出であった。ドイツ・オーストリアから仲間て来た連中が歓声をあげていた。グレーナは六時半頃やって来た。フランコが来ないので聞いたところ、シユテラ・ポイントから頂上側へわずかに来たところが高山病でダウンし、登頂を断念したとのことであった。あんなに元気に登っていたのに、判らないものである。

頂上の傍に氷河(Southern Icefield)があり、見物に行った。熱帯の氷河は温帯の氷河とは全く違う。氷河の縁は数メートルから一〇メートルぐらいのほぼ垂直のがけで、板の上に切り餅を乗つけたような感じであった。消耗が融解でなく昇華によるせいである。火口の中にも氷河(Furtwangler Glacier)があるし、対面の火口壁、ギルマンズ・ポイント(Gilman, s Point)の北にも階段状の氷河(Eastern Icefield)があり、熱帯氷河の特徴が興味深かった。いずれも最近は大規模な後退をしている。ゆっくりして、六時四五分に下山を始めた。途中でアメリカ隊に会った。ゆっくりではあるが、全員登っている。彼らの多くは運動不足で下ではフラフラ歩いているので、単独組三人は、何人かは登れないだろうと思っていたのだが。イタリア人とは全く兎と亀の関係となった。

ギルマンズ・ポイントは標高五六八五メートルで

コカコーラ・ルートが火口壁にぶつかる所であり、途中かなりの人とすれ違った。コカコーラ・ルートから登ってここで力つきて戻る人も大勢いる。ここからは、砂ホコリが舞う砂礫地を四七五〇メートルにあるキボ(Kibo)小屋までひたすら下る。さすがに夜中に起きて一五〇〇メートル登った後に、まっすぐに駆け下るといふ具合にはいかなかった。速足に、時には小走りで行くのが精一杯であった。キボ小屋は砂漠の真ん中にあるような雰囲気的小屋である。九時過ぎについて、今日初めての料理した食事をする。出発してから九時間近く経っている。ガイドのジェフリーが食事の用意をしてくれた。ここでコカコーラを売っている。まさに、ルートの名に恥じない。私は到底飲む気がしなかったが、ガイドがしつこく勧める。つまり、自分が飲みたいのである。仕方なく買った。

ここからは傾斜が緩くなり、ただでてくと歩く。正面に峻峰のマウエンジ(Mawenzi、五一四九メートル)が見えるのが慰めである。マウエンジとのサドル付近は草木のない砂礫砂漠でMoon Landscapeみたいである。この辺は気温が下がるので商売柄、地面を気にしていると案の定、構造土が発達している。この辺を歩いていて、このルートを登らなくてよかったとつくづく思った。これは単独組三人とも同じ思いであった。マチャメ・ルートの全くあきない、素晴らしい景色を満喫してきた後は、全くのanti-climaxであった。下るに従い、植生が出てきた。上部はヘザー(Heather)である。今日のキャンブ地、標高三七二〇メートルにあるホロンボ小屋には十二時半に着いた。小屋がたぐさ建っており、木立も見られる。水の音が懐かしい。丁度、一二時間のアルバイトであった。ポーター達と再会する。フランコは先に来て TENT を張っていた。ここまで来たら非常に元気であるが、シユテラ・ポイントでは頭痛

が相当ひどかったそうだ。残念がることしきりである。その内、グレーナも元気に到着した。アメリカ隊は夕方近くに着いた。彼らが来ると良くも悪くも賑やかである。アメリカ隊を率いているトウアー・ガイドは、グレーナの話しによると、チヨモランマの登頂者だという。彼とは下山してから少し話したが、チヨモランマでは彼の名前がついている新しいトラバース・ルートを開拓したという(東欧系の名前で憶えきれなかった)。キリマンジャロは八回目のプロのガイドである。

六日目(九月十四日)快晴

最終日は標高一八六〇メートルのマラング・ルートのゲイトまでの下りなのでのんびりと行く。天気が素晴らしいので朝食後、道を少し廻って写真を撮りに行った。キボが見事なパノラマで広がっていた。八時半過ぎに下り始めた。昨晚、時間があるのでガイドのジェフリーに賃金のことを聞いてみた。すると、一日当りガイドは二四〇〇タンザニア・シリング(四米ドルぐらい)、ポーターは二〇〇〇(三ドル弱)支払われるが、一九九二年から値上がりしていないそうだ。一方、会社に払うトレッキング代は値上がりしているし、タンザニア・シリングとドルの交換レート(当時一米ドル二六〇〇〜六五〇Tsh)は下がっている、実質的には賃金低下だと言っていた。

しばらく歩くと、登ってくるグループに頻繁に会うようになる。このルートを単独で登るのは少ないようだ。森の中、標高二七二三メートル地点にマンダラ(Mandara)小屋がある。大勢の人がいて、売店もある。下へ行くに従い緑が濃くなってくる。ただひたすら歩く。やがて幅広い、車が通れる道となり、登山口に近いことを告げる。この辺りには愛嬌のあるカラバス・モンキー(Colubus Monkey)がたくさんおり、道にも出てきた。アフリカを感じる一

時である。そして、例の「〇〇旅行」と書いた旗を振った一五人ぐらゐの団が賑やかにやって来た。服装、装備などは他のグループと比べて格段にいい。やはり、と思ひながらすれ違った。

ゲイトには一時半頃ついた。ここには国立公園の管理事務所があり、ガイド、ポーター、トレッカーなどたくさんの方がたむろして、売店も混んでいる。ここでウフル・ピークに登頂したという証明書をガイドからもらう。通しナンバー〇四〇六二である。いつからの通し番号なのだろうか。一九九五年なのだろうか。それにしては年号が入っていない。

ホテルに戻り、風呂に入って着替えさっぱりした頃合いを見計らって、ガイドとポーターが来た。五泊六日の行動に対して礼を言い、ビールをご馳走して、チップを払うのだが、皆の顔は当然期待に満ちている。ここでいくらもうかうかでこれからの生活が変わる。特に、日本人は気がいいので知られている。本で読んで、いくらかはさうかさんさん考えた。気持ちのいいガイドとポーター達であった。迷った揚げ句、やや多めかなと思つたが、ガイドには三日目の寄り道があつたので四〇ドル、ポーターには一五ドルを渡した。皆嬉しそうだったので、こちらもほっとした。そしてガイドには靴、スポン、スパッツ、帽子をあげた。ポーターの一人は政府の会計官だったが、クビになつたという。どうりで喋らすと英語が他の者より上手なわけだ。今回が二回目のポーターだそう。彼の生活にふつと思ひが行つた。

後でホテルに泊まつているヨーロッパから来た何人かとキリマンジャロの経験を話した時、チップの金額を参考のために聞いた。ガイドに一〇ドル払つたら、露骨にいやな顔をされた、というドイツ人もいた。私のはやはり、少し多めだったのかもしれない。日本人にとっては五ドルや一〇ドルの違いは円

の感覚でなんでもないが、彼らにとつては一カ月の現金収入にも匹敵するぐらゐの大金である。ガイドのジェフリーはこの次来るときは自分に直接連絡しろと、盛んに言つていた。会社・ホテルに搾取されなためたろうか。キリマンジャロの村にはガイドが八〇〇人程いるが、彼は忙しい時期で月に二回、それ以外は月に一回のガイドを行うと言う。因みに、彼のガイドとしての収入は年約二〇〇ドルだそう。そうすると、今回のガイドだけでチップも入れて、四分の一以上を稼いだことになる。道理で格別うれしそうな顔をしていたわけだ。

夜から雨になつた。天気に非常に恵まれた楽しい快適なトレッキングであつた。

談話室

(お便り及び短信コーナーです。皆様の気軽な発信をお待ちしています)

● 昨秋、武奈に登りました。正月明けには赤倉へ行くかと予約しました。ひまですからお誘ひ下さい。

(安藤元雄・幸枝 京都市)

● 昨年いろいろお世話になりました。益々の御活躍をお祈りしています。

(安田 武 宝塚市)

● 実は兵庫県日高町神鍋の植村直巳冒険館を御紹介しました。下着に何を着ていたかが、問題だそうです。(新)

● 小生胃を三分の二切除してから二年経ちましたが、現在特に問題なく、元気に暮らしています。食事も、術前の五分の四ぐらゐになり、お酒も少々飲んでいます。昨年五月一八日日本山岳会の会長に就任しました。

(五六〇〇名の会員、そして日本登山界のため、奮励努力するつもりです。梅里雪山ではほんとにお世話になりました。感謝します。未だ、全ての問題が片付いていません。早くすっきりしたいものです。それでも口惜しい残念な思ひが続きます。(斎藤惇生 長岡京市)

▲ 当時の留守居役担当として悔し涙にくれ、失意にあ

りました。もつぱら癒しの山行きに熱中していますので御安心下さい。

(新)

● 昨年京都大百周年の折にはお電話をいただき有難うございました。博物館へ行き、亡夫に会つて参りました。

(臨坂芳子 京都市)

▲ 本年八月にカラコラムへ出掛ける予定です。チヨゴリザを拝んで参ります。

(新)

● 昨年二月・第一〇回国際低酸素症シンポジウム(カナダ)、六月・第一七回日本登山医学シンポジウム(東京)、八月・国際登山医学シンポジウム(スイス)に参加しました。スイスでは、学会終了後ユングフラウ峰に挑戦しましたが、帰国時間の関係で登頂を直下で断念して下山しました。これは再挑戦するつもりです。今年は五月二〇〜二四日まで松本市で、『第三回登山と高所環境に関する国際医学会議』を、『第一八回日本登山医学シンポジウム』との共催で開催致します。私は『日本のヒマラヤ遠征と医学研究』そして『京都大学士山岳会』という講演を行います。御支援のほどを。

(中島道郎 神戸)

▲ 松本に近い人は、斎藤Yさんの講演もありますし、是非お出掛け下さい。

(新)

● 今年はカラコラム・バルトロ氷河へ行きたいですね。

(井上 潤 松原市)

▲ 平井リーダー以下十九名のツアーになります。よろしく。

(新)

● いつの間にか、六〇才台も半ばを過ぎ、老人と呼ばれる年齢になりましたが、元気に仕事や遊びで多忙な日々を送っています。昨年は、三月・長男泰生が二人の孫を連れて帰国、九月・懐かしい笹ヶ峰ヒュッテで、学生時代の山仲間達と楽しい一夜を過ごし、一〇月・長女と第二回父娘展をしました。展覧会の節は有難うございました。ことしも山登りしましょう。(川崎 徹 赤穂市)

▲ 岡山在住者(寺本蔵・奥村樹郎)を誘つて後山へハイキングを企画中と酒井さんより伺っています。御一緒願ひます。

(新)

●御無沙汰しています。昨年九月に、東京AACKで、

ハイク登山をやり、久し振りにコッテ、キョン、ソニ

アン、大四郎たちと遊びました。(岩倉哲男 千葉市)

●岡山大学の教師生活も三年になりました。昨年は中国

二回、イングランド、スコットランド、オーストラリ

アと海外出張で忙しい年でした。：樹郎

岡山弁にも慣れ、岡山っ子より岡山に詳しいと言われ

ています。外国人への日本語ボランティアではお互い

の文化の違いを学び尊重し合う事が初めの一步と考え

ています。：時子 (奥村 岡山市)

●昨年は那岐山で御一緒でしたね。スコットランドは、

私も出掛けていて、安仁屋氏と同様、最高峰のベン・

ネヴィス山をやっつけてきました。また、セントアン

ドリユウスで、ゴルフも楽しんできました。良かった

ですよ。 (新)

●昨年は山にゴルフと大変お世話になりました。

(高野昭吾 豊中市)

●AACK大阪火曜会(略称OKK)のゴルフ部会は、

第一四回を数えます。十四年も続けたことに呆れてい

ます。次の幹事は潮崎氏です。どうぞ宜しく。(新)

●昨年九月六日井上民二君が乗っていた小型飛行機が

サラワク州ランビル山頂直下に激突しました。彼が今

もつとも力を入れていた熱帯林の調査地、ランビル国

立公園で遭難したのです。「生きていてくれ」という切

ない願いは、遂にかないませんでした。彼の無念を思

うと、すなおに新春を寿ぐことができます。このよ

うな御挨拶を申しあげることをお許し下さい。去る

一二月四日熱帯林の修復の共同研究者であるサラワ

ク森林局のリーさん(長官代行)が盛大な記念植樹の催

しを開いてくれました。今回はランビルの一斉開花で

集めた種子を育てた苗を植え付けました。昨年によ

うに良い成績を上げてくれることを願っています。

(荻野和彦 松山市)

●TVでお目に掛った井上さんには、大きな期待が掛

かっていたのですが、悲しいことでした。残された皆

様の御活躍を祈ります。

●昨年一月より今年二月一六日までホンジュラスに

居ります。(沖津文雄 鎌倉市)

●成はこれまでとは少し異なった研究に取り組み、意

気盛ん。山はのんびり楽しんでいますが、テニスはモ

タモタ、ジョギングは亀の歩みの如く、これらは少々

新機軸の開発が迫られます。直子は山に開け、山に暮

れました。圧巻は四月の北海道余市岳滑降と七月の槍

穂高縦走でした。おかげでチェロはさっぱり。一番の

ショックは入れ歯が一本入った事。(能田 京都市)

●子供も卒業し、夫婦二人だけになり、毎月一回山歩

きを楽しんでいます。(岩瀬時郎 柏市)

●東京AACKの山行きプランナーをやって下さるよ

うお願いします。

●一月三十一日の北山ハイキングは、天気にも恵まれ楽

しい週末を過ごすことができました。また、「天寅」で

の新年会には五人の現役の諸君を含めて、計三一人の

参加を得て、昔にかえったようなコンパでした。笹ヶ

峰ヒュッテの修繕・改築問題についても忌憚のない意

見の交換ができ、先輩・後輩の垣根なしに議論できる

伝統が生きていることが再確認できて嬉しく思いま

した。今西錦司さんのレリーフ前での写真ができました

ので同封します。今年は、夏に名簿第二号の発行、

一〇月三・四日に第四回笹ヶ峰会親睦会の開催を予定

しています。よろしくご協力をお願い致します。

(笹ヶ峰会世話係 秋田雅規)

●先日の直谷、冬のハイキング、雪のなかを駄べりな

がら歩くことができましたこと、嬉しく思います。雪

道で皆様がスリッパひとつなさらず、しっかりと歩い

ておられるのを拝見して、失礼ながら、さすがは京大

山岳部のOBよと心強く思いました。実はその一週間

前の日曜日に、雪の皆子山へ、日本山岳会京都支部の

計画に加えてもらって、阪本グドさん、新井さんたち

と何十年ぶりのワカンジギ山行をやっていて、連続

の遊びで時間不足となり、定年前の仕事整理のため、

なつかしの天寅のパーティは失礼してしまいました。

天寅では私達現役山岳部員、OBのころも、いくどか

コンパをやりました。当時は元氣横溢、ためになんと

か会場を断られたことがあったものですから、久し振

りに行くのが一寸恐ろしかったのかも知れません。笹

お知らせ

薬師氏ゲスナー賞受賞

薬師義美氏の『新版ヒマラヤ文献目録』(一九九四年、白水社)が、第二回ゲスナー賞・目録・索引部門で銀賞を受賞された。まことに喜ばしい限りである。

ゲスナー賞とは、学術書の出版・輸入の雄松堂書店が、一九九七年創業六五周年を記念して創設されたものである。スイスの書誌学者・百科全書家コンラート・ゲスナー(一五一六―一五六五)にちなんで設けられた。

この賞は書誌・目録を対象にしているが、その性格(コンセプト)は、個人の努力によるもの、大作、多くの時間が費やされたもの、日本と外国を結ぶ作品、著者の人生が伝わるような作品という。この点で薬師氏の文献目録はびつたりの作品といえよう。

最初のそれこそ氏の手作り版(一九七二)、一九八四年の白水社版、一九九四年の『新版』、一九九五年の『追加・訂正』と、四半世紀におよぶ歴史がある。このような大仕事を、全くの個人でされたこと。欧文図書、邦文図書に、ロシア語図書も加えた国際的にも高く評価されているものである。更に丁寧な牽引が付け加えられている。

応募作品八四点というから、かなりの難関であった。受賞式は昨年一月六日に行われた。

ケ峰のことをはじめ、清談盛り上がったことを伺い、何よりに存じます。

(高村奉樹 京都市)

●一昨年の参議院選挙におきましては、皆様方大変なご支援をいただき、無事当選を果たして以来月日のたつのは早いもので、はや三年目を迎えております。国会での活動状況は、印刷物で適時ご報告させていただいておりますが、昨年はインターネットのホームページ『耕土築木』を開設し、国会活動はもとより、その他国土建設に関する情報を発信できるようになりました。これからは高度情報の時代であり、インターネットをフルに活用しての政治活動も必要であります。私としては、国会議員としては最先端をいっている大いに自負しております。また、昨年暮れには、『国土保全と地域間格差を考える議員懇談会』が衆・参併せて二〇六名の参加のもとに発足し、私とその事務局局長を仰せつかりました。自由民主党では、もっとも大きな懇談会となり、大変やりがいのある役回りで、身の引き締まる思いがしております。

(岩井国臣 参議院議員)

●高村氏から生まれて初めて原稿依頼を受けました。もう物を書く様な年も過ぎたし、ここ五十年も何も書いたことが無いので断ろうと思った。しかしあんな丁寧な書状を頂いたからには責めを果たすのが真実と想った。この二十日間、書き出してみたら色々なことが思い浮かんできた。苦しみながらも楽しい三週間でした。仮名遣いは全くメチャクチャ、誤字も沢山あるし、文章も良くないと思う。十枚という制限を五枚もオーバーしています。外国の山の項目は真っ先に切り捨てて下さい。とにかく責めだけは果たしたことにして下さい。楽しい二十日間でした。

(竹内佐郎 渋谷区)

▲貴重な興味溢れる原稿は、記載の通りです。どうも有難うございました。

(新)

●今年は小生のスキー山行に御一緒願える人が少ないようなので、急遽予定を変更し、五月の連休は広島吉村君たちとメキシコのオリサバ峰五六一メートルに登りに行くことにしました。三、四月もアイゼン練

習の山行が主になりそうです。(阪本公一 京都市)

▲昨年のエクアドル・チンボラソに引き続き、メキシコ遠征ですか。レポートを期待しています。(新)

●お手紙と写真ありがとうございます。「八〇〇〇メートルの上と下」を上越市の古本屋で四〇〇円で手に入れたとのこと、私はチヨゴリザに行く前から、H・ブルにそっこん傾倒していましたので、本の内容はよく覚えていました。「上と下」では、アイガー登攀の話、遙かな山にいつて帰ってくるまでの時間を賭けて、それに勝った話、単独でヴァツマン東壁を夜中に登った話など、興奮して読み、私もそのあとを行きたいと思ったことでした。ガストンレビュファの「星と嵐」も読んでいます。アイガーでブルが挨拶も無しにさっと横を駆け抜けていったということもよく覚えています。ブルがルートワークをして、足らなくなったハーケンをレビュファが渡したことも。古い記憶ですが、あの時はヒマラヤに賭けた情熱は大きかったです。藤平さんも私も「ブル何する者ぞ」という気持ちでした。しかしあとになってブルのあとをチヨゴリザでたどると、その偉大さにかぶとを脱いだことでした。私はブルの同僚のクルトディエンベルガーやマルセルシュムックなどにザルツブルグに会いに行ったことがあります。ブルが生きていたら、きっと会いに行っていたことでしょう。残念です。今年はチヨゴリザ登頂四〇周年で、講演会などの行事を考えています。

(平井一正 京都市)

●高村様へ。いろいろとご配慮ありがとうございます。ガスナー賞関係の資料を同封しますので、これでよろしくアレンジして下さい。別紙の紹介文は、高山龍三さんが、日本ネパール協会の「会報」一四六号に書いてくれました。高村さんいよいよ定年ということですね。長い間、ご苦勞様でした。われわれの世代もそんな時期をむかえることになったのですね。人生もあつという間で、私もレギュラーをはずれて二年目。しかし、時間があるような、ないような。どうぞご健勝のほどを。

(薬師義美 長岡京市)

熊楠賞に四手井氏

南方熊楠賞の第八回受賞者に森林生態学の発展に尽くされた四手井綱英さんが選ばれた。「身近な自然保護を提唱した熊楠の活動の継承」者として、里山ブームを引き起こし、高く評価されている。おめでとうございました。

松尾氏が名古屋大学学長に

会員の松尾 稔氏がこのたび名古屋大学学長に選ばれた。氏は、第三次梅里雪山の遠征に当たり、多大のご援助を賜った方である。ご活躍を祈ります。

雪崩ビーコン購入

若手の雪山活動に備え、雪崩ビーコンを購入した。保管者は山田が五台、中村が二台。活用されることを願う。

寄贈金

故多田政忠氏の遺族から、金十萬円が寄贈された。謹んでご報告します。

会員動向

入会者…小川芳男、泉 泰通、奥村樹郎。
退会者…梶浦 寛、福井 徹、江頭康夫。
物故者…島田正彦、富川盛道、平井章一、
山田善二郎。

▲おめでとうございました。「ヒマラヤ文献目録ができるまで」の原稿は、次号にさせていただきます。申し訳ありません。(新)

●菊池卓郎ことクメローが弘前から京都に戻ってきたこと、また、島田正彦ことVヤンが亡くなったこと、さらに左右田健次ことガンコが紫綬褒章受賞と、諸々の名目のもと、山岳部オールドタイムの集いが企画されました。この三人を知る昭和二十九年山岳部入部者までが独断と偏見で招集されました。

『二月二日はお忙しいところ、また遠いところから集まっていただき、たいへん楽しい会となりました。そのときの写真をお送りします。あまりにも楽しかったので、来年もやろうという話になりました。いずれにしろ、Vヤンとの再会はまだ当分先に延ばして、まだまだ先の長い皆様方には、どうかご自愛のほどお願いあげます。平井一正』

▲笹ヶ峰会名簿が役立って、結構でした。他の皆様方にも、何かの会合、催しにご参加の節は、お便りを編集長まで、よろしく。(新)

●平井様へ。ニュースレター八号の「京大山岳部前史」を興味深く拝見しました。藤平さん等の戦後派と梅棹さんとのマッキンレーをめぐるやりとりは、昨年一月日本経済新聞に連載された「私の履歴書」(「行為と妄想」という単行本にもなっています)でも読んでいましたし、日本山岳会京都支部の十周年パーティーでもアウトラインはお聞きしました。また梅棹さんの「山と旅」にも触れられていましたが、京大の場合、やはり今西錦司さんを中心とする強固な思想をもった人々が大勢おられたために、すぐにわかまりも融け、小異を捨てて大同に付けたため、その後の大発展に続いたわけで、今更のように敬意を抱く次第です。ところで、平井さんの文章のなかに、私にとっても忘れられない思い出が、二、三ありました。先ず毛利哲さんの名前です。私は四八年の春休み(三月末から四月にかけて、丁度、旧制中学四年終了で新制高校二年に編入される

という学制改革の年)に半月ばかり黒菱小屋に滞在してスキーをしていました。最初は同級生二人と一緒に行く予定でしたが、皆都合が悪くなり結局一人で出掛けました。敗戦後の混乱時代でしたので、黒菱小屋の滞在客は岡本さんという私より七、八才年長の大阪のスキー・マニアとの二人だけで、八方尾根はこの二人の買い切り状態という今では信じられぬような贅沢なスキーをしていたものです。そんな一日、京大山岳部の毛利さんが登ってこられ、翌日この毛利さんに連れられて、唐松岳に登った感激の思い出があるのです。この時に眺めた白銀の後立山と剣の素晴らしい景観が、私を山にのめり込ませた一大要因です。この毛利さんには、その後一度、大阪のJACの支部ルーム(関西学連の溜まり場にもなっており、阪大の徳永さんがいつもたむろしていました)で出合い唐松へ連れていってもらった御礼という機会がありました。多分、藤平さん等との鹿島槍天狗尾根の帰りに毛利さんだけ八方に寄られたのではないかと思います。いずれにせよ、懐かしいお名前を見付けました。さらに、白馬連山(杓子尾根、白馬主稜等)の山行が述べられていたが、五一年の春のことと思います。同年春、東鎌での工専山岳部の遭難で死んだ詠村は私の灘高山岳部の相棒で、この夏、その遭難碑建立の帰途、一年上の小川芳男と白馬に行きました際に、京大山岳部の今年の春山で「杓子尾根を登って楽しかった」と聞かされました。彼は新制大学の一回ですので四九年入学です。中学高校時代は、何度も一緒に山にいった仲間の一人です。四七年夏には大汝、立山から五色が原へも一緒にしました。灘高山岳部で、私は岩登りに熱中していましたが、卒業時には後続部員がなく、山岳部は一応休部状態になりましたが、新学期になると同時に、二年下の山好きの連中が「スキー登山部」という名称で復活させ、私は校長がボケット・マネーで買ってくれた山岳部唯一のザイルをこの部に引き継ぎました。当時聞き慣れない変な名前だなと思ったのですが、世話

をした山内さんという若い国語の教師(多分、藤平さんと同年代と思います)が京大のスキー部出身でしたので、この名前を復活させた理由が今になって分かりました。この山内さんは、現在兵庫県スキー連盟の会長です。以上、京大がらみの思い出です。(神戸大山岳会 金井健二)

▲歴史的証言の数々に驚きました。金井氏は六三年の神戸大ポリビア遠征隊長、現在はJAC関西支部理事。父君は勝三郎といい、わが国最初のスキー技術書の著者として有名。(新)

編集後記

今号から編集委員が変わりました、どうかよろしく。

新たに「談話室」欄を設けました。どうか、第九号の感想、身辺雑記など、葉書でも結構です。お便りをお寄せ願います。会員の声を沢山集めたいと思っています。

次号の原稿締切は八月二〇日です。

(新井 浩)

編集委員 新井 浩、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 一九九八年五月一〇日

発行所 京都大学学芸部 山岳会

京都府左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所